歴史地震
第29号(2014) 260頁

［講演要旨］元禄地震津波(1703)の大名領被害記録を完全に読み解けばどうなる？

都司嘉宣（深田地質研究所）

元禄地震の津波による房総半島の津波の被害、浸水高さ等を論じた研究には、羽鳥ら(1973)、羽鳥(1976)、古山(1983,1984)、伊藤(1983)、村上ら(2003)、都司(2004)、小野ら (2008)がある。

房総半島の場合、江戸時代の支配はモザイクの模様のように細分化されていて、隣り合う一村毎に領主である大名・旗本が違っているのが常である。そうして、元禄地震津波の被災記録は、支配する大名毎に、被害統計が作られていた。その被害数は、『楽只堂年禄』（新収日本地震史料・第 2 巻別巻、S2B と記す）に掲載されたているが、その多くの記事で地名が明記されていない。たとえば、S2B の７ページに次の記事がある。（数字はアラビア数字で表記する）

本多修理知行所安房国安房郡之内 3000 石
11 ヶ村、潰家 380 軒、内寺 3 軒、流家 109 軒、流船 52 艘、死 49 人、損牛馬 12 匹

の記載がある。流家 109 軒とあるのだから、この 11 ケ村の中に津波で大きな被害を出した村が含まれていることは自明である。しかしながら、その村とはどこなのかは、いっさい明記されていない。このため、上述の既往の研究では、このような記事は全く活用されることがなかった。

平凡社（1993,「日本歴史地名大系・千葉県」）によれば、江戸期には安房国安房郡には 77 個の村があった。その元禄 16 年(1703)の領主を調べ尽くすと、安房郡の安布里・大網・南条・大戸・作名・古茂口・山荻・小沼・坂足・伊戸・川名のぴったり 11 ケ村が本多氏の所領であった。この 11 ヶ村の本多氏石高を合算すると 2998.45 石と 3000 石に近い数字となる。このうち、沿岸の村は小沼以降の４ケ村のみで、安布里村から山荻村までの 7 村はすべて山間部の村々である。沿岸４ケ村はすべて、房総半島の先端部の洲崎のすぐ東側の砂丘海岸上にならんでいる。江戸期のこの４ケ村の家数の合計は「天保郷帳」によると 194 軒である。元禄期もこの数字はそれほど変化無いと考えられるが、この４ケ村で 109 軒の津波流失家屋を生じたのであるから、約 56%の家屋が流失したことになる。この４つの集落は、どれもおよそ平均標高 20m の場所に家屋の敷地があるため、津波はこの付近で約 20m の遡上高さがあったことになる。

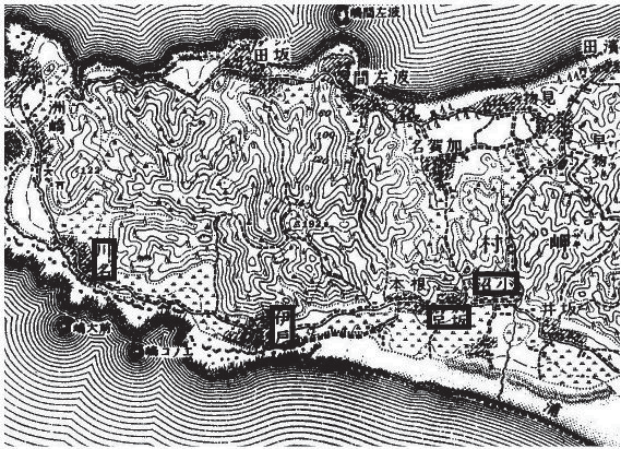

図１．安房国安房郡本田修理守領分４ヶ村

経験的に地震倒壊家屋１軒あたりの死者数は 0.05 人程度である。11 ケ村の潰家 380 軒を地震倒壊数とすれば約 19 人が地震による圧死者数、49−19=約 30 人が津波による溺死者数と推定される。これが 109 軒の流家で生じたのであるから、流家１軒当たり 0.28 人の溺死者を生じたことになる。同じような方法で、25 ヶ所の村での流家１軒当たりの死者数を推定することが出来た（図 2)。

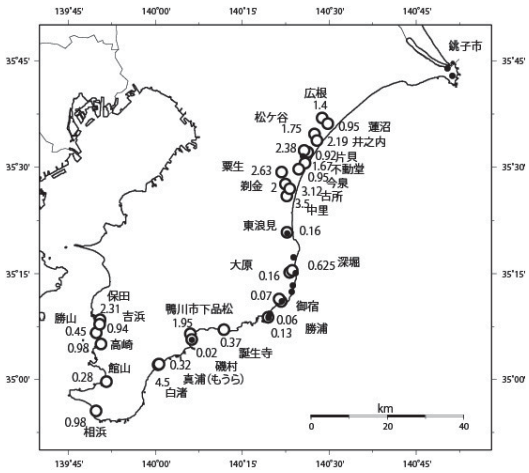

図２　流家１軒当たりの溺死者　黒丸は延宝 5 年(1677)房総沖津波に被災した村で　これらの村では、元禄津波での流家１軒当たりの死者数がきわめて小さくなった